

性教育の歴史社会学的研究 (2) 学校文化における生徒指導・道徳教育・月経指導の諸相

—1942～1972年の新聞記事言説からの検討—

柳園 順子

要旨

本稿は、1947年から1972年の新聞記事をもとに、新聞メディアがどのような形で性に関する議論を社会に発信し、学校文化が何を摂取し排除しながら性に関する指導を定位させていくのか、当時の新聞の果たした機能を検討した。新聞は政府が推進した「純潔教育」の動向を報じる一方で、性を扱うことに戸惑う学校や家庭に対し繰り返し意識改革を求め、時に政府の主張を援軍する役目を担った。民主化に向け改革に邁進する政府と学校や家庭では性の扱いをめぐる攻防があり、山本杉と大塚二郎ら純潔教育分科審議会委員が有識者として紙上に度々登場し、医師、校長、時に審議会委員として選択的に肩書を用いながら「純潔教育」浸透の折衝にあたった。政府は不良化防止・性病対策として「純潔教育」に期待していくが、時代の趨勢を背に学校文化は生徒（生活）指導、道徳教育、月経指導に分化させ「純潔教育」を用いた。

キーワード：新聞、不良化防止、生徒指導、道徳教育、月経指導

1. はじめに

敗戦直後の社会が混乱する中で、男女の不純な交遊を教育上憂慮すべき事象と捉えた政府は、文部省内に「純潔教育」審議機関を発足し、その目標、実施の方針、行う場所、方法等をまとめ、「純潔教育」を施策として実施した。筆者は、政府が戦後民主化という課題を包摂しながら「純潔教育」を推進し「新しい時代」の「新しい教育」と謳い男女の関係性を再定位しようとしたこと、社会教育において成人教育プログラムとして特に母に対し「純潔教育」の学習を促し青少年の不良化防止を母役割としたことを前稿で明らかにしてきた¹⁾。本稿は前稿に続く第二稿となる。

1947年に文部省社会教育局から「純潔教育の実施について」が発出された。後の1955年に純潔教育分科審議会（以下、審議会と略す）により「純潔教育普及徹底に関する建議」²⁾が文部大臣に提出され、「純潔教育の進め方（試案）」³⁾が示されている。こうした動きに先駆けて、同時期には「純潔教育」関連本が相次ぎ出版され、玉石混淆の「純潔教育」論が巷に溢れていた。その中で学校は性を扱うことに戸惑い、抵抗を示していた。

戦後性教育史では、田代（2003）⁴⁾が「純潔教育」が風俗治安対策として始まり男女平等の実現を展望に性教育の萌芽をみせたことを指摘しており、茂木（2011）⁵⁾により各地の教育委員会等が作成した純潔教育及び性教育の手引き書類の整理がされている。これら先行研究で示す政府の意向の傍ら、実際の学校現場では性を扱うことに戸惑いと抵抗があった。子どもや教師は地域社会で生活していることを踏まえると、学校周縁における通俗的理解に影響を受けてきた可能性が示唆される。それゆえ性教育の歴史の変遷を整理する上で学校周縁での議論は実証的に検討される必要のある命題であり重要な論点であるが、これまで十分に検証されてこなかった。これら通俗的理解についての検討は、性教育構築プロセスの解明に援用できる含意をもち、先行研究のアプローチに新たな知見を加えることに繋がると思われる。

そこで本稿では、当時国民にとって主な情報源の一つであった新聞メディアに眼差しを向け、戦後性に関する事項がどのように社会

に発信され、学校文化が何を摂取し排除しながら性に関する指導を定位していくのか、新聞の果たした機能を検証する。これらを通し性教育の歴史的過程を精緻に描きだすことを試みる。

本稿では、『讀賣新聞』^{註1)}（讀賣新聞検索データベース「ヨミダス歴史館」（1947年1月～1972年12月）⁶⁾から「純潔教育」関連記事を抜き出し、「純潔教育」施策を基軸にその展開を検討する。記事の収集にあたっては、純潔教育/純潔をキーワードに検索しヒットした記事の中から、重複するものや内容が該当しないものを除く計55本の記事を基に分析を行う。期間は文部省社会教育局により「純潔教育の実施について」（発社1号）⁷⁾が各都道府県宛に通牒された1947年から、文部省が「純潔教育と性教育は同意語である」（文社婦第80号局長裁定「純潔教育と性教育との関係について」⁸⁾と示した1972年に限定した。「純潔教育」施策を軸に新聞言説の展開をみることで、学校における性をめぐる議論に新聞が果たした機能を浮き彫りにし、その実像に接近する。

2. 性教育がなされていない？

(1) 学校への期待

闇の女への顛落など敗戦直後の暗い世相から青年子女を護る対策を講ずるとした文部省は、青年男女間の正しい交際と性道徳の高揚を図るとして「純潔教育」の実施を全国に通牒した。そして、これらの具体的内容を審議研究する機関として、純潔教育委員会（以下、委員会と略す）を発足した⁹⁾。後の審議会によって『純潔教育基本要綱』¹⁰⁾が発表され、エチケットと称して正しい男女のあり方を示した『男女の交際と礼儀』¹¹⁾が刊行されている。同書は広く全国に浸透したとみられる^{註2)}。

委員会発足に至る文部省内の議論については、すでに斎藤（2014）¹²⁾が明らかにしており、占領下における政府とGHQの関与を指摘している。また、山本（2013）¹³⁾によれば、1949年10月末までの日本では、GHQによる新聞検閲があったという^{註3)}。こうした先行研究を踏まえると、当時、新聞は政府の動向を随時報道するだけではなく、ある種の主張を国民に流布する側面を併せ持ってい

たとえられる。そのため本節では「純潔教育普及徹底に関する建議」「純潔教育の進め方」が発表される1955年までの新聞における議論をみていく。

1947年1月に文部省社会教育局から「純潔教育の実施について」が発出されたことを新聞はいち早く報じた¹⁴⁾。そして、中等学校生徒に対する父兄会や母の会が、生徒の不良化防止のために「純潔教育」に関する意見交換をしたと報道している¹⁵⁾註4。文部省が純潔教育委員会設置準備に入ることを掲載¹⁶⁾註5した翌月には、都社会教育課の肝いりで11歳から16歳の10人一単位で学校・公共施設に集まり、婦人会や学校の教員による男女共学向けの社会教育が実施されたとレポートしている¹⁷⁾。新聞は「純潔教育」実施に関する政府の動向を随時報じており、当時の新聞の関心のありかある程度、ここから推測できる。

1948年7月には、かつて高校で教鞭をとっていたという生物学者沼野井春雄の特集記事を組んでいる¹⁸⁾註6。沼野井は「性教育が狭い性技巧教育に解釈され、正しい性教育を妨げている」と訴え、委員会委員である医師安藤画一の言葉を引用しながら「倫理教育を重んじまず成人教育から始めよ」と発言している。当時、社会教育において民主化の振興のためには青少年の教育が重要と考えられていた。そのため、まず成人の教育を急務としていたのである¹⁹⁾。沼野井は「中学校における共学2カ年、新制高等学校発足から1年が経ち、本省から再三性教育実施の訓令が出ているにもかかわらず、東京都および近郊の調査では適当な指導者がいないとの理由で学校は性教育を実施していない」と非難した。そして「性教育を一人の教員ですること」は「わい談になる」と捉え、関係学科や校医を加えるなどして多数の教職員を前に研究授業形式で行うよう勧めた。性教育を間借りの学科と位置づけ、連携を保ち発展せしめて教授することを提案し、その役目は生物学が適当であると指南した。その上で①性科学家・社会教育家による性教育、②米国牧師による結婚式直後、新夫婦に授ける性技巧教育、③学校教育における性教育はそれぞれ内容的に根本的に異なると理論化し、性教育を行う指導者、一般の人々は(それらを)十分区別しかからねばならぬと釘を刺すのであった。

同年8月になると、杉並の某小学校で若い男性教員による女生徒に対するわいせつ事件が起きた。事件の第一報を報じた新聞は、連日センセーショナルに事件を取り上げた²⁰⁾註7。8月12日の社説「杉並校事件と純潔教育」では、社会各層に大きな衝撃を与えたこの事件はあくまで氷山の一角であるとして、こうした背景に6・3制実施により大量の教員が必要となったこと、それゆえ学校は特別訓練も受けていない代表教員がほとんどなのが現状で教員の質の低下が事件の要因、と批判した。そして教員の劣悪待遇から従来教員になるはずの師範学校新卒が学校就職を怠逃し、その一方で犯罪の下心で応募する青年や教育の自由の履き違えによる野放しが起こっている、と分析するのであった。新聞はこうした状況を生み出した全国の教職員に対し、その猛省と校長の責任を問う手段に講じている。同様に父兄に対しても「教育は学校が行うものだという古い概念を打破し、家庭教育、社会教育も教育の大きい分野であることを大いに反省し、自ら実行に移すべき」と次のように主張した。

我々はかかる不祥事を根絶する基本的なみちは、いわゆる純潔教育の普及徹底以外にないと思う。純潔教育には性教育と宗教情操教育の両面があるのであるが、小学校高学年頃から学校と家庭が協力して行うべきである。そのために文部省の純潔教育委員会はすみやかに具体策をひつさげて実社会に働きかけてもらいたいと思う²¹⁾註8。

このことから、新聞は「純潔教育」の普及徹底とその役割を純潔教育委員会に期待すると激励する一方で、教職員、校長、父兄に対し猛省せよと問責していることがわかる。そして「もっと先生たちは教育に愛情を持って」と希求しているのである²²⁾。

(2) 新聞が果たした機能

時を同じくして、性病予防法、優生保護法が成立施行された1948年には、読賣新聞社主催で「性の科学展覧会」、1950年には厚生省・文部省・読賣新聞社後援による「正しい男女交際と幸福なる結婚生活展覧会」が開催された。ここでは青年男女交際が幸福な結婚生活を導くとした新しいモデルの輪郭が描出されている。こうした啓蒙の一方で、性愛雑誌撲滅が掲げられた²³⁾。

同年2月には、エロ雑誌を手本に男女中学生が桃色グループを作り性的実験をしているとして、文部省が出版取り締まりに踏み出したことを新聞は報じた。アメリカ医学協会、社会衛生協会発行の性教育に関する図書を無償で翻訳する権利が審議会に与えられたことから、同月中旬には純潔教育シリーズが続刊すると紹介している²⁴⁾註9。

当時の社会状況を知る手がかりの一つに、同時期のちに純潔教育懇談会の委員となる間宮武と鈴木清が著した『純潔指導』²⁵⁾がある。同書からは当時の情景を彷彿とさせる次のような描写が確認できる。

肉体文字の勃興、ヌード写真、ストリップ、カストリ雑誌、映画のラブシーン、基地とパンパン、赤線・青線区域の拡散、こういったものが過敏な子供につよく訴える結果は相応にあまりある。至るところに性の刺激と誘惑が待ち受けている。

同書は、その一例として「しばし紙上を賑わす集団桃色遊技」の名で東京都の某中学校で「少年ナイトクラブ会則」というレイプ紛いのメモが発見された事件を掲載している^{註10}。これらの原因を「性に対する誤った指導によるもの」と分析した。記述からもわかるように、当時カストリ雑誌をはじめとした無秩序な性的刺激物が氾濫しており、多くの課題が山積していたと考えられる。正しき指針なきことや子どもへの影響に対する危惧の念が広がっていたことがうかがえる。

こうした危惧は審議会の動向からも裏付けられる。新聞は、審議会が厚生省に対し、同省人口問題研究所調査部第四課長篠崎信男の論文「国家的第調査機関による六三五組夫婦の性生活実態報告書」がエロ雑誌(この場合、1950年3月号『夫婦生活』夫婦生活社発行を指す)に官僚名入りで掲載されたことに嚴重抗議したと報じた²⁶⁾。審議会(代表:伊藤秀吉)、児童文化審議会(代表:神崎清)の法廷論争を取り上げ、今後良書推薦、悪書追放に関する判定に出版規程等委員会のような民主的組織による適切な措置を取るよう出

版界に要望したとしている²⁷⁾。従って、ここから審議会は性をめぐ
る情報の氾濫への規制とその指導に邁進していたことをうかがい知
ることができる。

注目すべきは、同時期に1950年11月に審議会から『男女の交際
と礼儀』が刊行された点である。新聞は「各学校、青年団体、婦人
団体、PTAに普及、両親や教育者がこれを足がかりに実生活に即
した明るい礼儀を生み出す範例」と掲げ、同ニュースを朗報として
発信している。先に見たように、政府主導で正しい男女交際と幸福
なる結婚生活を結びつけ純潔運動が展開されていた。出版界の自肅
要請と指導勧告を活動の一つとした審議会は、統制を図る取り締まり
的役割も果たしていたとみられる²⁸⁾。新聞はこうした審議会の
動きを随時報道し続けており、結果としてその活動を援軍する役目
もまた担った様相がここから確認できるのである。

(3) 月経指導・不良化防止

1951年6月、新聞は近く性教育コースの一環として「月経の教
え方」が発表されると報じた²⁸⁾。学校としても性教育があらゆる学
科の中で用いるべきだが、(1)取り扱いが難しい、(2)教えるのに適当
な人がいない、(3)安心して与えられる教材・教具がほとんどない、
すなわち、中学校での女子に対する月経の知識・手当で以外、取り
立ててというような性教育は行われていないことを冒頭で説いている。
ここでは月経の知識・手当を教えること、月経指導＝性教育と
認識されている。心理学者の意見として望月衛²⁹⁾は「親にも責任
があるが、教師ももっと勇気を出してもらいたい」と性教育に対す
る教師の怠慢を指摘し、続いて校長大塚二郎³⁰⁾が「ふさわしい教
師がいないことが要因であり、まずは職員室の浄化から」と言及し
ている。当時、両者は審議会委員であったが、ここではその附記は
なく、心理学者、校長として誌上に登場している点は着目に値する。

1952年2月の新聞では「高女学生に中絶多発」との見出しが躍っ
た。「審議会で純潔教育基本要綱など慌てて作ったものの、日本の
住宅構造の弊害もあり体裁だけの印刷物のみでは問題は解決しな
い」と問題を顕在化させ、現状に対する改善策を訴えている²⁹⁾。後
日「貧困から置屋業³¹⁾を営む親を持つ中学生を護れ、日本版明日
では遅すぎる」と見出しを掲げ、「純潔教育」を行った綴方教育³⁰⁾
を取り上げている。その一方で、こうした記事に対し掲載後に圧力
があったとして、次のように声を上げた。

純潔教育が教育界の大きな話題、教育者はもっと勇敢に社会悪
に立ち向かってもらいたい、西〇〇中学に「バンパンの締め出し
は反米思想だ」と圧力かかっている、〇〇教官は「赤」じゃない
かと言われせつかくの純潔教育が押しつぶされようとしている。
こんな時こそPTAの力が欲しい³¹⁾ ³¹⁾ (※〇〇は筆者により削除)

このことから、新聞は「純潔教育」を実施した教員らを勇気ある
存在と称え、実施しない教育者にその実施を促していることがわか
る。そして発信を非議する圧力に対し屈しないと、それにはPTA
の力が必要との見解を示している。

同年12月には基地の子を守ろうと青少年の不良化防止を主眼に
社会教育での「純潔教育」徹底に向け愛護班が作られた。「純潔教
育」に関する指導書を編集し各都府県教育委員会に流すこと、実
態調査、純潔思想の徹底を図る意味から46都道府県で「純潔教育」

地方大会、東京で中央大会を開く計画があると新聞は報じた³²⁾ ³¹⁾。
こうした記述から新聞は審議会の動向を報じながらも「純潔教育」
普及に消極的、あるいは抵抗を示す学校の姿勢を問い、その意識変
革を求めていることがわかる。そして変革の促進にはPTAの力が
必要と訴え、政府が浸透を図っていたPTAの効果を賛助し、啓蒙
しているのである。

3. 正しい結婚のための恋愛・愛情教育～山本杉³²⁾の座談会～

1953年から1955年の新聞には、委員会、審議会委員で医師の山
本杉が度々登場する。山本は、同新聞人生案内解答者として読者に
対し人生の道筋を示す役目を担っていた。山本を中心にどのような
議論が展開されたのか、ここでは整理しておくたい。

1953年2月、新聞は、鮮烈な内容が当時話題となった「映画『十
代の性典』を見て」を主題に、山本と女子高生の対談を誌上企画し
た³³⁾。対談では「男女共学が認められているにもかかわらず親の理
解が乏しい」「男女交際に親達の理解と監督が欲しい」「性知識がな
く性について教育をして欲しい」といった女子高生らの声と、これ
に対する母親の立場から「どんな悩みでも打ち明けて」「純潔は精
神的も大切」とのメッセージを掲載した。山本は、「思春期の乙女
は機会さえあればどんな道にも陥る危険性があり、反抗から自分を
めっちゃめっちゃにしたい年齢でもある。乙女を守るには何より
「純潔教育」と家庭の協力が必要」と対談を総括している。

同年10月の林□、阿部艶子との対談では「寝た子を覚ます性教育」
と「目覚めた子にヒロポンを打つ性典映画の横行」に対し、「今の
性教育は性生理の知識を教えることだけに急である」、「性と共に育
つ愛についての教育がなされていない」と慨嘆している。山本は、
正しい結婚のためには恋愛・愛情に重点を置き、「性知識よりも先
に学ぶ」ようを求め、次のように語った。

若い人は（中略）適齢期を過ぎててもいつでも恋愛できる自信を
持たなくては。そこで見合い期にある人はいわゆる性教育が必
要。それ以前は精神的教養を高める恋愛教育～愛情教育が必要だ
ということですね³⁴⁾ ³²⁾。

山本は、「恋愛感情を口にしても笑わないなど一つのエチケット
の方向を与えていく」、「良い恋愛をして良い結婚をする」ことを勧
めた。恋愛や愛情という用語を使い、男女間の関係を覆す、いわば
戦前の座標軸の転換を象徴するような発言を繰り返した。先で見
てきたように、1950年には同審議会から男女の交際の正しいあり方
をエチケットと称し、指南する『男女の交際と礼儀』が刊行された。
同書の解説本³³⁾をはじめ「純潔教育」に関する書籍³⁴⁾や特集記事
が全国に広く浸透されており、「デート」が流行語と化していた。
これらを摂取するかの如く、「性教育は正しい結婚に結びつくため
の正しい恋愛や愛情を学ぶもの」と山本は語り、結婚と恋愛・愛情
を重点に置いた。

恋愛と結婚の一致、すなわちロマンチック・ラブ・イデオロ
ギー³⁵⁾を彷彿とさせる山本の発言からは、月経や生理理論など性
の知識は「結婚を前提に」学ぶものとして位置付けられている。言
い換えれば、生理学知識より恋愛や愛情が大切であることを教え
「恋愛教育・愛情教育をまず先に行う」ことが指南されているので

ある。

4. 大塚二郎の登場

(1) 特性教育

1955年に発表された「純潔教育の進め方(試案)」³⁵⁾では、性教育と「純潔教育」が曖昧に記された。それと同時に、政府は男女の道徳の確立と社会の純化を目指す人間教育として、家庭・学校・社会のあらゆる教育の場と仕組みを通じて「純潔教育」の教育効果を挙げるよう推進した。同発表を「幼児期に性格の基礎ができることから、年齢、知能に応じて理解しやすい表現をし学習と同様に扱う」「女兒の指導は母か姉が良い」と報じた³⁶⁾「進め方」以降、新聞ではどのような展開を経ていくのか本節で確認する。

施策発表後の新聞には、「具体的にどう教えたら良いのか」を説く記事が増える³⁷⁾。そして次第に、「純潔の倫理を教える」ことへと議論の矛先は変化していく。例えば、女子高生にありがちな男性教師へのそこはかとなき慕情も純潔の倫理感に支えられてこそ師弟愛へ昇華する³⁸⁾、と説明するといった具合であった。1956年には、性に放埒な若者風俗を描いた太陽族映画が登場し、巷で話題となった。新聞はそれらを「ゆがめられた道徳欠如」と称し、不良図書等と結びつけ「刺激の影響が社会悪化の要因」と報じた³⁹⁾。こうした時好を背景に、同年12月には売春防止の行政措置が次官会議で内定された。1957年には政府は性病対策として「純潔教育」の徹底を図ることが改めて提唱された⁴⁰⁾。

1957年5月になると新聞は学校現場で性教育実践に卓越した人物として大塚二郎による「家庭での正しい性教育の進め方」を掲載する。この頃から、大塚が度々紙面に登場していることが確認できる。大塚は、教育者が性教育を行えない理由を「教師自身が性を危険なもの汚いものという考えから抜けきっていないため」と言及した。その解決策として「性を美しいもの大事なものという考えに切り替える」ことで、月経教育をチャンスに正しい性教育ができると説いた。そして「先生も父兄も古い考えを捨てる」よう、次のように教授した。

これまでは月経の手当、生理理論にだけにとどまっていた。正しい性教育は、この機会に女はどのように生きるべきかという人間教育にまで発展させることが必要なのです。(中略)女の喜びを見出させ、女の生活を認識させることが性教育の本当の実践であり技術だといえましょう⁴¹⁾。

このように、大塚は女子に対し女の生活への認識を持たせるよう繰り返した。一方、男子に対しては性感が中心であり、それに振り回されない男子の意思教育が必要と主張した。家庭でも同様に両親の正しい態度が大切であるとして、女子に対し女子の性の立場を理解させ、女子の性に協力することを教えることが男女共学であってこそできる教育とした。「月経を通じ」手芸や裁縫など「女性の特質を生かす」仕事に興味を持たすよう指導すること、その理由を「女の生き方、女らしさというものが生理に関係付けられたものだから」とした。大塚は月経と女性の生き方を関連付けて論じた。1951年に学習指導要領において家庭科教育で「特性を生かした教育」^{註22)}が導入されていることを鑑みると、大塚の発言は月経を軸

に転用した特性教育論ともいえ、性役割の受容とその指導を求めるものであることがうかがえる。

(2) 「純潔」への憂い

1963年6月になると、新聞は青少年の非行化問題、性犯罪の増加を学校での性教育の不徹底が原因と苦言するようになる。ここでも大塚が登場し、小学校での性教育は、初めは「性に目覚めたものに対する個人指導」ととどめ、それが「5、6人に増えたら集団指導」に切り替え、「3分の1を超えたら一般教育」として行うよう提案した。しかし、学校だけの性教育には限界があることから「社会、家庭、学校の三者が一体とならなければ正しい性教育は行えない」としている⁴²⁾。

1966年10月には「家庭と非行少年」の題で自分を責め絶望感による自殺問題の増加を報じた。少年少女の自殺原因上位には「失恋」と「えん世」が上がっていた。女子中学生が「きのうはあの人が好きだと思うと、きょうはこの人のほうがいいと思うから」と、自分の純潔を疑い自殺する事件も発生した⁴³⁾。こうした事件について、大塚は「性の目覚めの時期に生きる人生観を与えなければならない」と前置きし、「性への好奇心は死さえも厭わないエネルギーを底に秘めている、いかに生きるかという哲学を持たせる教育が必要」とコメントしている。

戦後、政府の施策として「純潔教育」の普及徹底が図られた。しかしその実施に学校は抵抗を示していたのが実情だった。学校、家庭双方の根強いタブー感が払拭できずだけでなく、性に関し様々な解釈が混在していた。子どもを取り巻く課題も複雑に交錯しており、学校はその対応にも苦慮していたのである⁴⁴⁾。大人の都合による売春に始まり、戦後の混乱から高度成長期へと社会の急激な変化を背景に学校では男女共学開始の一方で男女交際(不純異性交遊)、性非行等、様々な性に関する課題が山積していた。その中で発育発達過程にある多感な思春期を迎える子どもたちに自分の純潔を責める者も出現した。自殺した女子中学生の事例は、性をめぐる曖昧で不明瞭な言説の往来の狭間で性の目覚めと未熟さゆえ、それらに従順し翻弄させられた末の結末ともいえよう。

同年3月、大塚は日本純潔教育研究協議会を設立⁴⁵⁾し、11月には第1回研究発表会を開催した⁴⁶⁾。中学での「純潔教育」の公開授業開催の様子や大塚が授業参観したこと、1968年4月には大阪府科学教育センター実施の中高生の男女交際について親と子の意識調査の特集⁴⁷⁾以降、「純潔教育」に関する記事は殆ど見られなくなる。戦後男女共学を開始と共に不良化防止対策としても期待された「純潔教育」であったが、1960年代後半から70年代前半を境にウーマンリブの流入等による時代の趨勢の中で、「純潔教育」という用語もまた「性教育」へと置き換わっていくのである⁴⁸⁾。

5. おわりに

以上、1947年から1972年の『讀賣新聞』の「純潔教育」をめぐる言説から、学校における性に関する議論を中心にその展開を追いかけてきた。ここで明らかになったのは、新聞は政府が推進した「純潔教育」推進の動向を報じる一方で、性を扱うことに戸惑う学校や無自覚な家庭への批判を繰り返し、意識改革を主張するなど、時に政府の主張を援軍する役目を担っていたことである。

これらは当時の政治・経済・社会の状況と密接かつ複雑に関連し

ながら形成されたものであり、それらを切り離して論じることはできないが、施策成立からその実施、終焉に至る潮流を概観したとき、民主化へ社会改革に邁進する政府と学校や家庭の間に、性の扱いをめぐる攻防があったことが浮かび上がる。その中で新聞には繰り返し有識者として山本杉と大塚二郎などの審議会委員が登場し、医師、校長、時に同委員として選択的にその肩書きを誇示しながら「純潔教育」浸透の折衝にあたってきた様相が確認できる。

印刷だけの教育と批判があったにせよ、学校は1948年から1980年にかけて教育委員会等が手引書作成⁴⁹⁾など試みていたことをもう一度ここで特記したい。本稿でみてきた議論の展開を紐解くと、政府が不良化防止・性病対策として「純潔教育」を期待していく一方で、時代の趨勢を背景としながら、学校文化においては生徒指導（生活指導）や道徳教育、月経指導にそれぞれ分化させ「純潔教育」を接続してきたことがうかがえる。本稿の知見は、新聞言説からの議論の検討に留まるという限界を有するにせよ、学校文化において不純異性交遊や性非行を生徒指導の対象に位置付け、道徳教育でその教育語り、性教育で月経指導を行う所以、それらすべてが「純潔教育」施策の影響を受けながら構築されたものであることを示唆している。この知見は「純潔教育」の社会的流通過程を解明する上で新たな考察材料として提供するものでもある。

戦後日本における性教育構築プロセスを明らかにするには、その歴史の変遷を様々な角度から追究していく必要がある。本稿で指す時代の趨勢の一つにある1960年代後半から70年代前半のウーマンリブ運動等との関連については、稿を改めて今後の研究課題としたい。

註

- 『讀賣新聞』に限定した理由は、発行部数が多く全国の記事が掲載されていること、データベース化されており記事探索が容易であることなどである。
- 『男女の交際と礼儀』作成に至る過程については、拙稿2014「正しい男女のありかたとしての「純潔教育」-『男女の交際と礼儀』（1950）をめぐる千本木道子の論放を通じて-」近大姫路大学教育学部紀要.第7号.175-183頁参照
- 山本によれば検閲は1949年10月31日まで続いたという。同書には朝日、毎日、読売はプレスコードをよく守ったとの評価を受けたとの記録が記載されている。
- 私学のいかなる事由によるも男女共学とする文部省の姿勢に対し、キリスト教学校関係者による批判記事も掲載されている。
- 記事には近く文部省に専門委員会を作り「純潔教育」の具体策を作り「各地でも委員会を設け」どしどし実施すると記されている。
- 沼野井は生物学者の立場から性教育論を展開した。1949年東大教授に就任。沼野井春雄1948「性教育者の問題」『児童心理2（9）』金子書房41-45頁、1949「共学と性教育の指導者たち」『ガイダンス（3）』28-39頁等。
- 杉並事件の詳細については、拙稿「戦後改革期の矯風会による純運動と母役割の強調-杉並事件（1948）をめぐる対応を中心に-」九州教育学会研究紀要第42巻.37-44.2014年を参照
- 1947年1月25日の『讀賣新聞』には「街の女をなくそう、サムズ大佐、矯風会」とマ司令部サムズが、増える「街の女」を大きな社会問題と捉え、厚生省・司法省は全国6工業地域にある15の授産所に8万人収容すると報じている（全国600職業紹介所に申込）。特に民間団体の役割を強調し救世軍、赤十字、矯風会が世話してくれると報じた。救世軍、矯風会は純潔教育委員会委員の多くを占める娼婦運動団体でもあった。
- 「青少年を性愛雑誌から切り離し、健全な性教育を普及することにより、終戦後の泥沼に咲いた毒の花、性愛雑誌は事実上抹殺される運命にある」と記述されている。純潔教育シリーズは純潔教育委員会により計画されたもので、1949年発行の久布白落実『純潔教育はなぜ必要か』には同書及びすでに発刊された『純潔教育基本要項 附性教育のあり方』を含めた7冊（他5冊は近日発行予定）の記述がある。
- 間宮らによれば「少年ナイトクラブ会則」には「一、女子は男子にからだを求められたとき、素直に与えること、反抗すればリンチを行う、二、唇を求められても同じ、反抗すれば無理に行い、リンチを加える、三、成功はクラブ会員出席しているときのみ会員交代で行う」など13項目が記されていたという。間宮はこれらが中学生に実施されたかは疑問だが、こうしたことが興味本位に描かれ不健全な性に対する考え方が脳裏を往来していた事実を問題視していた。間宮は1958年から純潔教育懇談会委員。
- 茂木によれば、終戦直後カストリ雑誌が横行したが、純潔教育分科審議会が槍玉に挙げたのは婦人雑誌、夫婦雑誌と厚生省だったという。（茂木輝順2015「性教育の歴史を尋ねる 戦後：純潔教科審議会の活動（その1）」『現代性教育研究ジャーナル』日本性教育協会10頁）
- この記事での肩書きは心理学者
- この記事での肩書きは東京都世田谷区立中学校長
- 置屋は家の部屋の一部を売春の場として提供する稼業。日本の住宅構造上、敷居がなく子どもへの悪影響が問題視された。
- 占領軍によるPTAの啓蒙により文部省はPTA設置を推奨し学校にPTAが設置されていった。1952年にはその全国団体が結成された。
- 基地周辺では置屋同様、売春に関連する施設が多くあり、基地周辺の学校に通う子どもへの影響が問題視されていた。
- 山本杉は1947年～純潔教育委員会（1947年～）、1949年～純潔教育分科審議会（1949年～）、1958年純潔教育懇談会（1958年～）の全ての委員を務めた人物である。
- 「出席者：慶大教授 林□、文部省純潔教育分科審議会委員 山本杉、作家 阿部艶子」と記載されている。
- 例えば伊藤秀吉・大塚二郎・金子貞子・山室民子・山本杉・望月衛1951『文部省版男女の交際と礼儀—学校における指導の解説—』目黒書店など
- 山室民子1951『よいこのエチケット（学校図書館文庫）』牧書店など。山室は純潔教育委員会・純潔教育分科審議会・純潔教育懇談会全ての委員の全てを務めた人物である。
- 渡辺らは恋愛から結婚へのプロセスとしてのデートといった新しい概念の受容は、恋愛結婚の割合が見合い結婚のそれを

上回った1960年代半ばに定着が始まった、と指摘する。(渡部秀樹・目黒依子1999『講座社会学2 家族』東京大学出版60頁)

22. 特性という言葉は個人の特性でなく、男女の性による違いを強調するために用いられ、それぞれの「特性」を伸ばすための異なった教育を与えることが「特性に応じた教育」で1951年の学習指導要領において家庭科教育に関連して用いられた。(横山文野2002『戦後日本の女性政策』勁草書房31-35頁)

引用参考文献

- 1) 柳園順子2018「性教育の歴史社会学的研究(1) 学校・社会・家庭で何が期待されたのか」姫路大学教育学部紀要第11号.111-117
- 2) 社会教育審議会1955.3.18「純潔教育の普及徹底に関する建議」
- 3) 純潔教育分科審議会1955「純潔教育の進め方(試案)」
- 4) 田代美江子2003「第9章敗戦後日本における「純潔教育」の展開と変遷」橋本・逸見編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店
- 5) 茂木輝順2011「目録文献 純潔教育及び性教育の手引き・実践報告書等文献目録(1948~1980年まで)」女子栄養大学教育学部紀要:「教育とジェンダー」研究9.71-80
- 6) 1947年1月~1972年12月: 読賣新聞(検索データベース「ヨミダス歴史館」)
- 7) 文部省社会教育局長1947.1.16「純潔教育の実施について」(発社一号)2004『性暴力問題資料集成第1巻』不二出版
- 8) 文部省第80号局長裁定「純潔教育と性教育との関係について」
- 9) 文部省「純潔教育委員会規程/純潔教育委員会委員」2004『性暴力問題資料集成第1巻』不二出版
- 10) 社会教育連合会編1949『純潔教育基本要項 附 性教育のあり方』印刷局.44-45
- 11) 文部省純潔教育分科審議会1950『男女の交際と礼儀』印刷局、他文部省純潔教育分科審議会(社会教育連合会)、1950『男女の交際と礼儀 純潔教育シリーズ4』印刷局、文部省純潔教育分科審議会1950『新礼法讀本—男女の交際と礼儀—』日本教育新聞社など
- 12) 斉藤光2014「純潔教育委員会の起源とGHQ」『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会.35-55
- 13) 山本武利2013『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』岩波書店.63-88
- 14) 「若い男女に純潔教育」『読賣新聞』1947年1月17日
- 15) 「中学生に文化教育」「男女共学」『読賣新聞』1947年1月25日
- 16) 「純潔教育委員会」『読賣新聞』1947年1月27日
- 17) 「少女を正しく、清く、仲良し会で指導」『読賣新聞』1947年2月4日
- 18) 「性科学と性教育: 沼野井春雄」『読賣新聞』1948年7月8日
- 19) 柳園順子2018「性教育の歴史社会学的研究(1) 学校・社会・家庭で何が期待されたのか」姫路大学教育学部紀要第11号.111-117
- 20) 「杉並第二校事件」『読賣新聞』1948年8月1日、「教官の非行次々暴露」『読賣新聞』1948年8月11日
- 21) 「社説: 杉並校事件と純潔教育」『読賣新聞』1948年8月12日
- 22) 「武津、除名」『読賣新聞』1948年8月14日、「武津と校長処分」『読賣新聞』1948年8月18日、「PTAと教育ボス」『読賣新聞』1948年8月22日など
- 23) 柳園順子「戦後日本における「純潔教育」にみる家族」第25回日本家族社会学大会(追手門学院大学)2015年
- 24) 「少年に多い愛読者、見捨てられた性愛雑誌」『読賣新聞』1950年2月12日
- 25) 鈴木清・間宮武1954『純潔指導』日本文化科学社12-15.30頁
- 26) 「お役人が性記事、文部省純潔教育分科審議会嚴重抗議」『読賣新聞』1950年2月1日
- 27) 「チャタレイ、青少年を毒す、両機関から判定機関を要望」『読賣新聞』1951年6月5日
- 28) 「性教育の実態、欲しい手引書、親・教師は勇気を持って」『読賣新聞』1951年6月17日
- 29) 「社説: 矛盾した社会の純潔教育」『読賣新聞』1952年2月11日
- 30) 「中学生を護れと教官、純潔教育に起つ、綴方は描く夜の女の生態、西×中」『読賣新聞』1952年2月6日
- 31) 「純潔教育とPTA」『読賣新聞』1952年2月26日
- 32) 「基地の子を守ろう、音楽映画で指導、来年から不良化防止の愛護班」『読賣新聞』1952年12月29日
- 33) 「思春期の性問題 映画「十代の性典を見て」(山本杉・女子高生4名座談会)」『読賣新聞』1953年2月7日
- 34) 「性教育、正しい結婚のために、恋愛・愛情を重点、性知識よりも先に」『読賣新聞』1953年10月10日
- 35) 純潔教育分科審議会1955「純潔教育の進め方(試案)」文部省
- 36) 純潔教育人間育成の一環に、対象は教師・母親、文部省の構想」『読賣新聞』1955年3月22日、「純潔教育はこうして、審議会試案まとまる」「純潔教育の進め方、文部省試案、年齢、知能に応じて理解しやすい表現を」『読賣新聞』1955年3月25日
- 37) 「幼児期の性教育、子供の疑問は当然、年齢に応じた説明を」『読賣新聞』1955年5月12日
- 38) 「編集手帖: 純潔の倫理を教えるべきではないか」『読賣新聞』1955年7月19日
- 39) 「青少年の性犯罪、各地の実情と対策、愛人を特飲街へ売る、太陽族映画で好奇心、目立つ集団的犯行と無関心、愛育運動ようやく広まる」『読賣新聞』1956年8月29日
- 40) 総甲第199号内閣官房作成「性病対策について(売春対策審議会の意見具申について)1957年10月25日
- 41) 「性教育のすゝめ方」『読賣新聞』1957年5月1日
- 42) 「性教育現状・あり方とその限界、個人から集団指導へ徹底した方法こそ必要」『読賣新聞』1963年6月3日
- 43) 「家庭と非行少年 自分を責める絶望感 心開けるような配慮を」『読賣新聞』1966年10月1日
- 44) 柳園順子2018「性教育の歴史社会学的研究(1) 学校・社会・家庭で何が期待されたのか」姫路大学教育学部紀要第11号.111-117
- 45) 「中学の純潔教育、大部分の学校が無関心か逃げ腰」『読賣新聞』1966年10月1日
- 46) 「このままで良いのか純潔教育、根強いタブー扱い、子供達は

興味本位に」『讀賣新聞』1966年11月29日

47) 「中高生の男女交際 親と子の意識調査 予想外に深いミゾ

親はもっと勉強を」『讀賣新聞』1968年4月25日

48) 「性教育、その方向と課題、人間を教える姿勢」『讀賣新聞』

1970年8月26日

49) 茂木輝順2011「目録文献 純潔教育及び性教育の手引き・実

践報告書等文献目録（1948～1980年まで）」女子栄養大学教育学

紀要：「教育とジェンダー」研究9 71-80

50) 柳園順子2016「学校における「純潔教育」普及に関する研究①—

『純潔教育系統案』の誕生：松元事件を手掛かりに—」姫路大学

教育学部紀要第9号、131-136